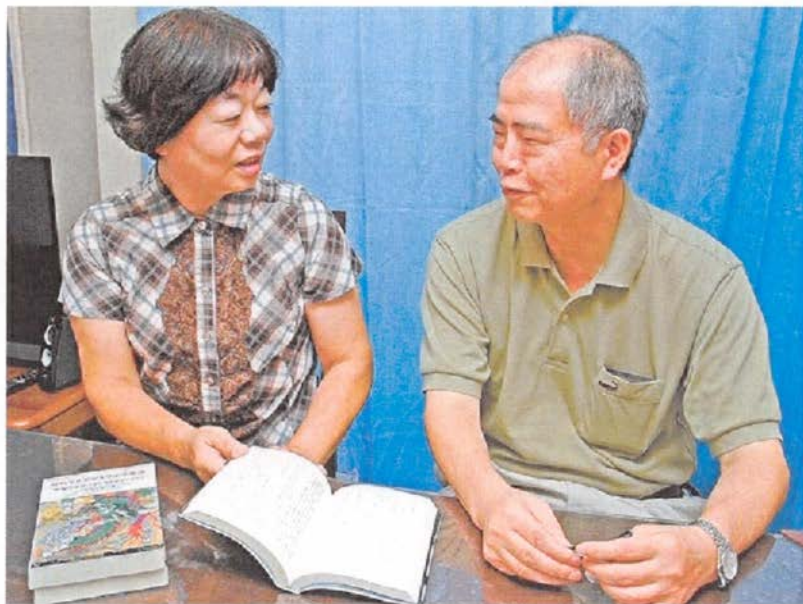


飛鳥期人々の葛藤描く

聖徳太子も登場

飛鳥時代の奈良や京都を舞台にした小説を、奈良市中登美ヶ丘、平原晶子さん（60）とペンネーム・朝皇龍古Ⅱがこのほど出版した。聖徳太子の幼少期などを描き、「理想を掲げ国づくりに取り組む人々の姿を通じ、若い世代に日本に誇りを持つてもらえれば」と話している。



完成した小説を前に執筆時のエピソードを語り合う
平原晶子さん（左）と正樹さん＝奈良市中登美ヶ丘

平原さんは1994年から昨年12月まで木津川市に居住。「歴史の宝庫で、魂が目覚めた」といい、両親の介護の合間に始めた図書館通いで古代史の蔵書を読むうち、夢だった小説家への思いがよみがえり、2006年に執筆を始めた。

「遙かなる未来のために（青龍）」は、上宮皇子（聖徳太子）や蘇我馬子、物部守屋らに架空の人物も加わり、物語が展開する。蘇我氏と物部氏の権力闘争の渦中で揺れる人々の心情を描き、琵琶湖や山城地域など身近なエリアも登場する。

文献を調べ、「本当はこうだったのでは」という国内外の動きを物語にした。心情やせ

りふは自身の経験から想像を膨らませ、小説出版の経験がある夫の正樹さん（62）の協力も得て完成させた。続編の構想もあり、「ライフワークとして取り組みたい」と意気込む。発行は名古屋市のフイツーンリユーション。413冊、1800円（税別）。（笹井勇佑）